

# 素 顔 拝 見



医歯学系・准教授  
(硬組織形態学分野)

依 田 浩 子

平成20年9月より硬組織形態学分野にお世話になっている依田（いだ）です。本学出身の22期生で、大学を卒業してから16年も経ち、気付いたら大学に残っている同期生もあと4人になっていました。

はじめに私の生き立ちを少し紹介致します。出身は新潟県上越市で、日本スキ一の発祥地として有名な雪深い高田で生まれ育ちました。大自然に恵まれた環境、言い換えれば山にぐるりと囲まれた片田舎の小学校に通い、課外活動として夏はマラソン、冬はクロスカントリーと、皆が嫌がる過酷な競技ばかりさせられていました。おかげで、多少の困難な環境にもへこたれない気質がこの頃に培われたのかもしれませんが。中学校では吹奏楽部に在籍しましたが、高校時代には楽そうな運動部に入ってみようと思い、バドミントン部に入部しました。ところが、陸上部かと思う程の走り込みとハードなトレーニングが待っており、こんなはずではなかったのに……と思いながらも、何とか続けて高校時代を過ごしました。おかげで、高校のマラソン大会では陸上部員を差し押さえ優勝することができ、頑張っていていればいつか褒美があるものだ、と高校生ながらに感じたのを覚えています。ちなみに私の人生で、後にも先にも一番をとったのはこのマラソン大会だけです。

新潟大学歯学部卒業後は、小児歯科学分野で5年間小児歯科臨床を経験した後、口腔病理学分野に10年程お世話になりました。そして現在は硬組織形態学分野に在籍しており、それぞれの教室で

沢山の貴重な経験をさせて頂きました。その中でも最初から一貫して続けてきたものが「歯の発生・発育に関する研究」でした。小児の歯の萌出遅延の原因を探る研究から始まり、歯胚の発育過程における細胞外基質分子の役割の解明、さらに歯の発生・発育異常である歯原性腫瘍まで研究対象に広げ、様々な角度から歯の発育について考え、研究してきました。さらに、2000年には文部省在外研究員としてアメリカ国立衛生研究所（NIH）に留学させていただき、遺伝子改変マウスの歯の解析をする機会にも恵まれました。NIHには日本からも沢山の優秀な研究者が集まってきており、留学時代に知り合った仲間は、日本に帰国後も研究仲間としてお互いに刺激し合えるとても大切な友人になっています。当時は私にとっては結婚二年目での单身渡米となり、留学するかどうかは勇気の必要な決断でしたが、今では自分にとってかけがえの無い貴重な財産となっています。若い研究者の皆さんには、是非留学していろいろな面での見聞を広げることを強くお勧めします。

最後にプライベートについて少しご紹介致します。現在は長岡に住んでおり、毎日新幹線通勤をしています。最初は気力・体力ともに大変に感じていた遠距離通勤でしたが、この生活も10年になり今ではすっかり慣れて、むしろこの通勤時間が一日の唯一の癒しの時間となっています。一応主婦なので、大学では帰宅時間を気にしながら仕事を終わらせ、ぎりぎりセーフで帰りの新幹線に乗り込みます。帰宅後は家事に追われ、それが終わる頃にはすでに眠気で意識もうろうとしながらベットに倒れこみ、気付いたらまた朝が来て大学へ……という毎日の繰り返しです。したがって、朝の新幹線の中では、缶コーヒーを片手に好きなJAZZの音楽を聴きながら、本を読んだり、物思いにふけったり（ほとんどはボーッとしているだけです）、時には曝睡したりと、唯一ゆったりと自分の好きなことができる時間になっています。

朝は始発新幹線に乗るので人も少なく、車内は静かで極めて快適な空間です（朝早いのでちょっとつらいですけど）。そしてこの時間が一日の始まりの気持ちと体のリセットになり、一日の元気の源となっているようです。

最後になりますが、ときには帰宅が最終新幹線になってしまうような不良主婦に不満も言わずに、応援し支えてくれている優しい家族には言葉にできない程の感謝をしています。また私のこのような状況を理解し、仕事面で多くのサポートをして下さっている大島勇人教授をはじめとする硬組織形態学分野の皆様、10年来の恩師である口腔病理学分野の朔敬教授には心より感謝しています。諸先生方の支えのおかげでここまで頑張ることができ、今後はいい研究成果を残す事で恩返しをしたいと思っている今日この頃です。

＊



超域研究機構・准教授

多部田 康 一

こんにちは、超域研究機構の多部田です。素顔拝見ということで、仕事以外の趣味などの素顔を紹介するところかもしれませんが、最近学生教育にもたずさわらなく、誰かわからない人になっているかと思しますので特に学生さんにむけて自己紹介させていただきます。

私は現在、超域研究機構“歯周疾患が全身に与える影響に関する分子基盤解明”プロジェクトの専任教員として勤務しております。平成19年3月までは歯周診断・再建学分野に所属しておりました。私は平成9年に本学を卒業いたしました27期生です。学生時代は、よく先生方に怒られ、試験期間も他の人より長かったような学生でした。どちらかといえば実習や総合診療室での臨床実習が好きで性に合っていると思いましたが、卒後は大学院へ進学しました。私が卒業したころは大学を卒業すると即大学院へ進学する、希望する講座に

て2年間研修医をおこなう、直接開業医さんへ勤務するという3つの選択肢がありました。当時は大学院重点化が進められている時期であり、今では考えられないことですが同期の約半数が大学院へ進学しました。大学院へ進むにあたってはさらに4年も自分に勉強（研究）なんてできるのか？といった不安もありましたが、興味もあったので、あとあと後悔しないよう研究生生活をまず4年間全力で頑張っ、そのあとに次を決めようと思ったことをよく覚えています。当時歯科保存学第2講座（現歯周診断・再建）の講師であった山崎和久先生が大学院生をさがしており、偶然のご縁で、先代の原耕二教授のもと第2保存（歯周病学教室）へ入局させていただきました。大学院では歯周病の自己免疫的側面や歯周病原性細菌由来抗原に対する自然免疫機構について研究をしました。細菌が生体の炎症を誘導することは学生の皆さんご存じかと思ひます。その強い炎症誘導作用をもつグラム陰性菌の外膜にあるリポポリサッカライド[LPS]抗原が生体側のToll like receptorという分子により認識され、細胞内へシグナルが伝わり炎症反応が生じます。私の大学院在学中、1998年に初めてこのことがアメリカで明らかになりました。これは生物学において本当に大きな発見で自然免疫が再度、脚光を浴びるようになった出来事です。大学院を修了して医員を経た後、大学院での仕事と関連して、山崎先生にもご尽力いただき運良くそのToll like receptorを見つけたDr. Bruce Beutlerのもとへ約3年間留学する機会をいただきました。滞在した米国カリフォルニア州San Diegoは年中温暖な気候のとてもすばらしい都市でした。安いお給料でぎりぎりの生活でしたが、仕事も生活も何事にも変えられないとても充実した時間を過ごすことができました。大学院に入って研究をおこない、そこからひろがった学生の頃には全く想像もしなかったさまざまな出来事、人との出会いは私にとってとても貴重な経験です。

H17年に留学から帰って、すぐに臨床実習を担当することとなり、学生さんと接する機会が増えました。機会を見つけては大学院へ勧誘し、他大学、他科であっても大学院へ進むことを勧めてい

ました。理由は様々でしょうが、現行研修医制度もあってか大学院へ進むことを希望する人が少ないことが、とても残念に思いました。明確なビジョンをもって臨床を行っていかうとすることも大変すばらしいことです。一方、もし少しでも大学院や研究ってどんなものだろうだろうという気持ちがある方には是非とも大学院進学を勧めます。少しでも興味があるならまずやってみたらいいのという気持ちと、一歩踏み出すと想像しなかったような世界がひろがるかもしれないと本当に思うからです。大学院を経て開業し立派に臨床をされている先生方もたくさんいらっしゃいます。どの分野であっても学生さんは是非大学院への進学も検討してみてください。ついでにもし私たちのプロジェクト（大学院）に興味のある方がいらしたら是非下記 Web へアクセスしてみてください。

私の今年の一步はスポーツジムへ行くことです。おなかがだんだん出てきてズボンがはけなくなってきたもので。

[http://www.dent.niigata-u.ac.jp/yamazaki\\_labo/](http://www.dent.niigata-u.ac.jp/yamazaki_labo/)

＊

医歯学系・助教  
(歯科矯正学分野)

竹 山 雅 規

歯学部ニュースをお読みの皆さんこんにちは。歯科矯正学分野の竹山雅規です。前教授の花田晃治先生に入局を許可され、歯科矯正学講座に大学院生として入局したのが平成6年なので、現在は入局15年目になります。平成20年1月1日付で矯正歯科診療室の特任助教を拝命し、今回のこのコーナーへの登場となりました。

生まれも育ちも新潟市で新潟市以外に住んだことはありませんが、新潟は気候もそんなに悪くなく、食べ物もお酒もおいしくてとても過ごしやすいところだと思っています。

研究については、大学院時代は当時の口腔解剖学第一講座にお世話になり、小澤英浩先生の指導の元、ラット歯根膜の改変について研究しました。現口腔再建外科の泉先生、当時口腔外科学第一講

座の伊藤先生、東大の整形外科の星先生、義歯診療室の田中みか子先生などの先生が大学院の同期でしたが、大学院時代はそれぞれの先生にいろいろな面で助けられました。特に大学時代から仲が良かった泉先生は当時一解剖の大学院生で、テクニカルな面を中心にいろいろ助けてもらい、今でも口腔外科と矯正の連携診療でお世話になっている長いつきあいです。大学院修了後は、矯正治療に関連した歯の移植、顎変形症や唇顎口蓋裂の矯正治療などの研究を行い現在に至ります。

趣味については、高校、大学と写真部に所属していましたが、最近は（昔も？）写真が趣味と言うには写真を撮ることが少なくなりました。読書も好きですが、現在は読む量が減りせいぜい1か月に1冊です。最近はノンフィクションを良く読みます。音楽を聴くのも好きで、特に60～70年代のロック、ポップスを良く聴きます。ビートルズのファンクラブに中学生の頃から入っていて会員歴26年です。平成19年にベルリンでの学会発表（初めての海外で勝手にわからず、同行の山田秀樹先生に大変お世話になりました）の折り、帰りの経由地のロンドンに少し寄り道をしてきました。その際、ビートルズが最後に録音したアルバム「アビーロード」のジャケットで有名な、スタジオ前の横断歩道に行ってきました（写真1）。普段は多くの観光客がいるそうですが、この時は早朝のためか人がおらず、ジャケットの写真と似た雰囲気と言葉にできないほど感動しました。

食べ物については、カレーが好きで、大堀幹線沿い坂井東にあるナタラジャにほぼ週1ペースで通っています。ナタラジャは、（奇しくも私の入局



写真1



写真2

した年と同年ですが)平成6年にオープンした新潟県内で最初の本格的インド料理店です。私が最初に行ったのは平成10年の春なので、週1ペースだと年50回くらいで、現在までに500回以上通っていることになりませんが全く飽きません。ナタラジャのいいところは同じメニューでも日によって味が微妙に変わるところで、そのため長年通っても飽きないのだと思います。ナタラジャにはバブさんとタニカさん(写真2)の2人のシェフがいて、作る人の違いもあって飽きないのかもしれませんが。ここで使われている野菜は、亀貝と十日町(旧中里村)の野菜だそうです。中里が属している魚沼のコシヒカリのおいしさは有名ですが、野菜もおいしいです。そのためか、ナタラジャの野菜カレー(中身はその時々で変わり、いろいろな野菜が使われます)はとてもおいしく、特に夏から秋にかけては野菜がおいしくなるせいか、本当に食べに来て良かったと思わされます。興味のある方はぜひ行って食べてみてください。辛さは調節できますが、私はいつもちょっと辛めにしています。

それではこの辺で。今後ともよろしく願います。

\*



医歯学系・助教  
(歯周診断・再建学分野)

島田靖子

平成20年1月より歯周診断・再建学分野の助教に採用していただき、早1年が経とうとしております。“素顔拝見”に原稿……昨年の1月に総診のライター机に初めて座ったとき並みに、助教になったのだなあ実感しております。

富山県で中学・高校時代を過ごし、平成6年に本学に入学しました。本学を卒業後、当時は研修医制度が必修ではなかったので歯周診断・再建学分野(当時は第2保存科)の大学院生として入局、卒業して医員に採用、そして現在に至るといふ歯周科純粋培養です。新潟にはかれこれ15年以上住んでいることになります。当然雪にも寒さにも抵抗はなく、NEXT21、三越、伊勢丹……「なんちゅー都会なが!」(訳:なんて都会なんだろう!)とわくわくしたことがついこの前のことのようにです。

学生時代は部活にアルバイトに明け暮れていましたが、ちゃんと授業にもでていました。アルバイトは、家庭教師・塾講師などのメジャー系はもちろん、結婚式場、某大手ハンバーガー店、フリースで有名な某大手衣料販売店、三越の販売員、ビールの試飲、サッカーや大相撲のイベント会場での会場整備……いろんなことをやりました。部活は中学・高校・大学ともバレーボール一筋です。歯学部に入ってから、オールデンタルにおける“新潟大学歯学部女子バレー部黄金時代(自称)”を満喫しておりました。最盛期にはセッター以外のスタメンの身長が160cm以上で全員経験者、格下の相手には“2軍”が登場し、新潟商業高校の女子バレー部から「全国大会で何度も優勝されているとお伺いしたので、ぜひ練習試合をお願いします」と依頼されたこともありました。当然、オールデンタルのレベルについてお話して丁重にお断りしましたが……。私はサーブが得意で、ちょっと自慢は15-0で1セット取ったことも(そのころは

1セット15点、15本サーブを続ける、ということ(です)。サーブ、というプレーはバレーボールによらずラリーを行う球技一般に言えることですが、唯一自分の実力のみが試されるプレーだと思いません。アタックやレシーブはその時々で来るボールや状況が様々ですから。サーブの失敗は全て自分の責任で、正に自分との闘い。1年生の時に緊張して頭が真っ白になり全くサーブが入らなかったことが悔しくて、その後は相手チームの狙ったところへの打ち分け、ボールの回転の有無なんかの球種に至るまで一生懸命練習しました。翌年からはゲームの1本目のサーブが常に自分に回ってくるようにフォーメーションを組んでもらって“私の最初のサーブで試合の流れを持ってくるんだ!”と自分を追い込んでまたまた練習したこともありましたが、なんだかスポ根話になりましたが、デンタルで全国各地に行っては観光したり、おいしいものを食べたり飲んだりしたことも、とってもいい思い出です。部活やアルバイトなどで、学生時代にいろんな人といろんな関わりを持つことができた、というのは、今思えば臨床においても非常に役に立っている気がします。臨床も常に患者様と関わりを持ちながらの仕事ですから。

と、学生時代のこと(しかも勉強以外の)ばかりを書いてまいりましたが・・・最近時々、「私の仕事は歯科医師? 教員?」と思うことがあります。歯科医師になって9年、やっと少しずついろんなことが見えるようになり始めましたが、教員としてはまだまだ1年生。教えること、って難しいなああと日々戸惑います。妹は学校の先生になって9年目なので相談してみると、「私だって難しいよ～」と。そうだね。この原稿を書いている今日は、平成21年の御用始め。今年は患者様にも学生さんにも何かお役に立てるような歯科医師かつ教員になれるようにがんばろう!! と決意も新たに締めくくりたいと思います。

\*



医歯学系・特任助教  
(口腔解剖学分野)

鈴木 晶子

こんにちは。平成20年4月より口腔解剖学分野の特任助教としてお世話になっております、鈴木晶子です。出身は茨城県で、地図で見ると新潟のちょうど反対側の太平洋沿いにあります。水戸黄門や納豆の水戸、原発事故の東海村、学園都市や宇宙飛行士の筑波、実は日立製作所発祥の地など良くも悪くもそこそこ知られている場所はあるのですが、えっ茨城だったの、とか東京の近くだっけ、と結構陰が薄い県のような感じです。子供の頃から、メジャーなものから芋虫までたいていのムシは育てたり、庭に生息してお友達です。今でもカタツムリを見かけると連れて帰りたくなるのですが、最近は温暖化の影響なのか見かける事も少ないのが残念です。

平成15年に本学歯学部を卒業し、口腔解剖学分野に大学院生として入学してから5年が経ちました。学生時代は卓球部に所属し、他大学の学生や様々な立場のOBの先生方とつながりが出来たことは良い思い出です。学部を卒業してからは日々ラットやマウスと仲良くなっていくのと裏腹に、患者様や歯科診療に携わる機会がなく、臨床とは縁遠くなってしまいました。最近では学生さんに、歯医者ですか? と聞かれたり、同級生との臨床の話題について行けなくなりかけており、ちゃんと免許はとれたはずなのにポリクリの5年生や総診で診療している6年生の方が私よりよっぽど歯科医らしいかもと、つくづく感じます。現在は、大学院時代に始めた研究テーマである「顎関節の発生の組織学的研究」を前田教授と井上特任准教授のご指導のもと行っています。全身の関節はどれも同じ構造・同じ発生様式・同じ機能だと思われがちですが、歯科領域と関係の深い顎関節だけは特別であることがわかっています。これらの違いが、顎関節症やリウマチ性関節炎、腫瘍など様々な疾患の病態や発生頻度、治癒過程の特

異性を生み出しているのではないかという考えをもとに、ラットやマウスで免疫組織化学や電子顕微鏡を使って検索しています。1つ1つは臨床の場で治療や予防に直結しているわけではありませんが、病態解明や治療の根拠の土台の一端を担えればと思って続けています。また、基礎講座のもう1つの柱である講義と実習にも携わらせていただくようになって2年が経ち、教えることの難しさを感じています。自分が受けた講義を思い出してノートを読み返してみると、わかりやすく、基礎から最先端まできっちり盛り込まれている充実した時間であったことが懐かしいです。立場が逆転した今、夜遅くまで実習室を解放して下さったり、くだらない質問につきあって下さった先生方のありがたさが身にしみます。人前で話す事が苦手な私にとってはかなりの努力が必要ですが、あの頃の講義に近づけるように、また学生さんに人体の不思議や巧妙性に興味を持ってもらえるような講義をしたいとは思っているものの、講義の後は、今日はわかってもらえただろうか、と不安と反省の繰り返しです。

研究も教育も駆け出しで知識・技術・経験などすべての面で未熟ゆえに毎日が、そしていつまでも修行中で、気がつくとも学生時代よりも勉強して試験を解いています。これからも皆様のご指導をいただきながら、少しでも新しいニーズに応えていけるよう視野を広く持って応えていけるよう努めてまいりたいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

✧



医歯学系・特任助教  
(歯周診断・再建学分)

奥井隆文

皆さん、こんにちは。平成20年4月から医歯学系の特任助教となりました奥井隆文です。長野県長野市出身で、実家は善光寺から歩いて10分です。長野県民なら全員歌えると有名な長野県歌「信濃

の国」は小学校で叩き込まれたため、もちろん歌えます。というか、新潟県民は新潟県歌の存在すらわかっていない人が多く、摩訶不思議です。長野高校時代の最後の冬はなんと長野五輪の真っ最中。新しいビルがどんどん建って、新幹線もできました。日の丸飛行隊(スキージャンプ)やスピードスケートの清水選手の大活躍のせいで受験勉強に身が入らず、外国人だらけの町へ繰り出していました。そして大多数の友達は都会に憧れて首都圏の大学へ進学する中、私は真逆の日本海側、新潟大学歯学部に進学しました。「何故に新潟を選んだのか？」って聞かれたら、だいたいこう言います、「そこに海があるから。」長野県人は海への憧れが強い人が多く、私も例外ではありませんでした。小さい頃の夏の一番の楽しみと言ったら、車で3時間くらいかけて行く海水浴。よく上越の海の家におじゃましていたので、その頃から新潟に縁があったようです。海水浴の当日に雨が降ると、急遽、上越市立水族館に行き先変更！ 大水槽はどんな映画館のスクリーンよりも迫力があり、感動の連続でした。今でも、水族館は大好きな場所の1つです。そして、大学生時代は夏になると海岸でごろごろしたり、バーベキューをしたり、1人たたずんだり、海を満喫しました。ただし、冬の海がこんなにも荒れ狂うものだとは新潟に来るまでは知りませんでした。余談ですが、私の長野の友達は、新潟は全域で豪雪地帯だと勘違いしていて、それはきっと中学校の社会の教科書に「冬になると2階から出入りする人の写真(たぶん十日町あたり)」の写真が載っていたからでしょう。大学を卒業した後は、歯周診断・再建学分野の大学院に進学しました。アカデミックな香り？に憧れたのが一番の理由かもしれません。研究を直接指導してくれたのは、山崎先生(現口腔生命福祉学科教授)で、歯周炎病変部に浸潤しているある種のT細胞に注目して分子生物学的にその役割を解析しました。山崎先生からは、研究者としても臨床家としても「リサーチ・マインド」は欠かせないと教えを受けましたが、私も今になって「リサーチ・マインド」の大切さがわかるようになった気がします。また、研究の合間を縫って、兼ねてからの憧れだった大型バイクの免許もとりまし

た。昨年の夏休みはライダーの聖地、北海道ヘッーリングに行くことができ、オフの日も充実した日々を過ごしています。

大学院卒業後は、医歯学系の特任助教となって大学に残ることになりました。「特任助教って何？なんで特任？特命係長と関係あるの？」などと良く聞かれますので、簡単に説明します。特任と名がつくのは、「口腔からQOL向上を目指す連携研究」という事業に対応するためです。この事業の概要は、口腔のQOL向上を目指すために、国内外の大学間でネットワークを構築し、共同研究を行うとともに、大学院教育を高度化し、優れた歯学研究者や歯科医療人を育成することです。前田先生が代表の新潟大学は、研究参加だけでな

く、この事業のとりまとめという重要な役割も果たしています。実は、大学院生時代、この事業の一環で他大学の大学院生とお互いにプレゼンテーションをする機会があり、分野の全く異なる研究者から沢山のことを学びました。最近ではアメリカ、イギリス、タイなどの大学とも連携をとっており、大学院生の国際交流にも一役買っています。今後ともぜひ注目してください。

このような感じで、海・バイク・研究・臨床と、私の通ってきた道にはいつも「憧れ」が転がっていました。また、新しい「憧れ」を探して、そこに辿り着けるように努力していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

